によって判定できる。それ以前には、何らかの後処置をくわえてそれにたいする反応を確認して、前処置の効果を判定していた。肆成についていえば、後処置として「舶来した牛痘毒」を接種して、その直前の処置によって防禦力を獲得できたか否かをたしかめたということである。

一般に実験動物に反応をおこさせるために、被験物質を投与することを、実験生理学や実験薬理学では「攻撃する」という表現を用いることがある。「攻撃する」や「攻撃毒」といっても、けっして細菌戦争とは縁もゆかりもない言葉なのである。

添川が「攻撃用毒」という用語を使用したことはまちがっていないし、専門家が日常使用している言葉として、何らその影響を考えることなく使用したにちがいない。しかしちょっとした配慮が必要ではなかったか、とも思う。親しく教えをうけた後学として、新刊紹介の任をあたえられた機会に、添川の名誉のためにあえてのべておきたい。

以上二、三の問題点はあるが、今までうずもれていた小山肆成の業績をあきらかにした成書として、おおいに教えられる所がおおい。なお著者は、さる一一月一〇日に病没されたことを追記する。

（深瀬　泰旦）

〔時事通信社、東京都千代田区日比谷公園一ノ三、電話〇三―三五九一―一一一一、一九九四年一二月一五日発行、B6判、二〇八頁、定価一五〇〇円〕

大塚恭男著『医学史こぼれ話』

医史学研究を行う者は時代を越えた医学ジャーナリストである。すなわち時代を溯って取材に行き、考察を加えて記事を書き、読者に届けなければならない。これを記者の立場に立ってやって見せてくれたのが『医学史こぼれ話』である。

『漢方医学』という月刊誌で初めてこのコラムを見た時から非常に興味を持った。記事の初めに発信地と年がきちんと入っていて鮮やかな印象を与え、著名な人物が主役として登場し、一般の医史学書とは一味ちがった柔らかい表現でその人物の言動の意味や時代背景を紹介していて、サラリとしたユーモアで締め括る。一つの記事は四〇〇字足らずの短いものである。それが毎号二題ずつ、縦に細長いコラムに横書きで書かれていた。漢方に馴染みのうすい者にとっては、雑誌の中でこの部分だけを楽しんで読んでいた。

新聞記事に準じた書き方なので執筆者名はついていない。誰が書いているのだろう。実に博識、洋の東西を問わず色々な地域・時代が並んでいた。内容はこぼれ話と名乗っているように、医学の発明発見の物語ではなく、特に三面記事で幅広いニュースが盛りこまれていた。

それが今回一冊の本となって世に出た。大塚恭男先生の筆によると知って納得がいった。西洋医学を充分にこなした上で、わが国の東洋医学の第一人者としての名声の高い人であ

る。

今回は縦書きにしてある。二色刷りにしたためにソフトな雰囲気になったが、年と地名が欄外に出て淡い色になったためにやや印象が薄くなっている。連載の時のような二つの記事の組合せの面白さは消えている。西洋編（一三四題）東洋編（五五題）日本編（八二題）と三つに分類して時代の順に並べ変えたからである。人物については生年没年の他に簡単な解説が欄外についたことで、医史学に詳しくない人々にも親しめるような配慮がされている。偉大な人物の意外な面を知ることができるのである。

内容は連載の時のものにあまり手直しをしないでそのまま再録されたようだが、私の記憶ではもっと沢山あったはずである。一部省略されたのだろうか。

やや困ることといえば東洋編で人名地名に読めない字が出てくることである。所々にはルビが振ってあるが、医史学に親もうと思って本書を手に取る人に解りやすい道しるべを作ってやりたいものである。やわらかな文体で読む貴重なチャンスだと思えたからである。

日本編では漢方の処方の名が人物より主役を占める所がある。漢方の雑誌の記事であるから、そのくらいの知識は当然という前提のもとに書かれているのだろうが、これが意外に難物である。日本の医学史が西洋医学の影響ばかり取上げて欧米の医学に追いつく姿に注目してしまうのは、漢方処方のとりつきにくい名前が邪魔をしているのかもしれない。明治以前の医学を漢方が支配していたのだから、これについても触れなければいけないのに、一部の専門家以外は東洋医学史を語れなくなっている。これを機会に大いに勉強したいと思った。

全体を通して、これは医史学入門者にとっても役立ち、ある程度の知識を持った人々にとっても有意義に楽しく読める書である。取材に行った記者が感想を述べるふりをして、大塚先生の批判精神がイキイキと表現されていることに感銘を受けるにちがいない。

（大村　敏郎）

〔臨床情報センター・東京都千代田区六番町三、電話〇三―三二二一―一八七二、四六判、二七八頁、定価二三〇〇円〕

岩田　誠著『ペールラシェーズの医学者たち』

医師の群像をまとめる場合、時代・地域・専門分野・師弟関係など色々なまとめ方がある。その特異なものとして、今回同一の墓地に埋葬されている医学者を取り上げた珍らしい書物が世に出た。著者の岩田誠氏は神経内科の専門家で現在東京女子医大の教授である。

二十余年前留学中のパリで、墓地案内書を手にしながら有名人の墓参りに通うことになった同氏は「探し当てた墓の前に立つと、そこに眠っている人物が実在感をもって私の前に現れ、自らの生きた人生を語ってくれるように思われてなら